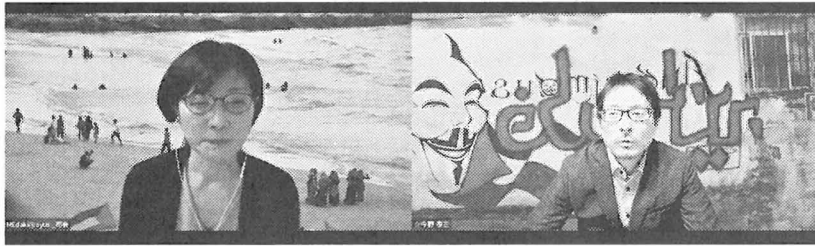


# いのちの平等性への攻撃

アーユス 「パレスチナ・イスラエル」セミナー



アーユス仏教国際協力ネットワークは13日、オンラインセミナー「二歩引いて考える パレスチナ・イスラエル問題」を開催。スピーカーの中京大学の今野泰三教授が、ガザ地区への軍事侵攻が進むなか、非人道的な状況に置かれたパレスチナの歴史的背景や国際政治の現状を解説した。

## 医療者や国連職員も犠牲に

今野教授はハマスとイスラエルの武力衝突が起

きる以前の10カ月間に、イスラエルの攻撃で200人以上のパレスチナ人が亡くなり、ヨルダン川西岸やガザ地区で「衝突や人権侵害が起きていた」と指摘。イスラエルのネタニヤフ首相率いる「極右政権」の誕生で植民地化が加速し、「死者が増えていくにも関わらず世界は沈黙していることに対する焦りや怒り。色々な感情がパレスチナ社会に高まっていた」と背景を解説した。

これまでにヨルダン川西岸とガザ地区で1万2千人以上が犠牲になったほか、病院機能の停止、インフラの破壊による衛生状態の悪化や感染症の流行を危惧。医療者や国連職員の殺害、住民への退避勧告など、「国際法の重大な罪であるジェノサイドや強制移送との指摘もある」とイスラエル軍の攻撃を非難した。

パレスチナとイスラエルの歴史的な背景にも言及。イスラエルは入植者が植民地化して作った国。先住民のパレスチナ人は土地を奪われ、追い立てられた」と今野氏。現在のガザ地区はイスラエルが水や電気や食糧、人の移動を管理するなど「実効支配が続き、「住

それを弾圧して抑え込むという力もすごく強い」と解説した。

国連決議でパレスチナの自決権を認めることがグローバルサウスを含めた「世界的な総意」であるとし、各国で起きている停戦を求めるデモは「いのちの価値は平等である」ということを証明し

ないといけない。いま明らかに平等でも公平でもない。人間が共通して持っている価値への攻撃と捉えている人が多くいる」と分析した。

民の生活を保障する義務を果たさず、内部から反抗が起きているテロリストだといって爆弾を落とすということを何年も繰り返してきた」と憤った。欧米諸国がイスラエルを擁護することに対し、「イスラエル批判は必ずしも反ユダヤ主義というわけではない。しかし、ヨーロッパのキリスト教社会にあった反ユダヤ主義を解決しないまま、中東のパレスチナに丸投げして解決したふりをしてきた」との見解を示した。一方で、イスラエルにもパレスチナ人と連帯して、入植地での不当な扱いに反対する活動の流れは常にあるとし、「ただ